

論壇・隨想

古文書、六十年前の記憶

泉 裕（文昭32卒）



左 大島和郎 一橋大OB会長 右 筆者

令を奉迎した節目の年、今年の夏にあつた出来事を中心に、約六十年前の記憶について書き記しておきたい。

平成二十六年七月十一日（金）夕刻、大阪市立大学陸上競技部OB、陸友会の二十数名が、銀座のライオンズヤードに集つた。

新グラウンドは、大学が、OB会を含めて多額の資金を集めて造つたもので、全天候型である。白線の引かれた赤いコースと、フィールドの緑の芝生が、周囲の深い木立に映えて非常に美

らの台風のあとを追う様に、空席の目立つ新幹線の午後の便で上京した。翌日行われる、第六十四回三大学対抗陸上競技大会（旧三商大戦）の前夜懇親会に出席の為である。

栄山監督から、各種目別の状況の説明に意気軒昂、一日お先に祝杯、氣勢をあげた。

殆んどがリタイヤー組で、世界各地に赴任していたものも多く、何十年ぶりかの再会に話は弾んだ。その夜は関氏と都内のホテルに泊つた。

翌日七月十二日（土）東京国立市にある一橋大学陸上競技グラウンドで、旧三商大（一橋大学、神戸大学、大阪市立大学）対抗、第六十四回陸上競技大会が行なわれた。

新グラウンドは、大学が、OB会を含めて多額の資金を集めて造つたもので、全天候型である。白線の引かれた赤いコースと、フィールドの緑の芝生が、周囲の深い木立に映えて非常に美

らの台風のあとを追う様に、空席の目立つ新幹線の午後の便で上京した。翌日行われる、第六十四回三大学対抗陸上競技大会（旧三商大戦）の前夜懇親会に出席の為である。

栄山監督から、各種目別の状況の説明に意気軒昂、一日お先に祝杯、氣勢をあげた。

殆んどがリタイヤー組で、世界各地に赴任していたもの多く、何十年ぶりかの再会に話は弾んだ。その夜は関氏と都内のホテルに泊つた。

翌日七月十二日（土）東京国立市にある一橋大学陸上競技グラウンドで、旧三商大（一橋大学、神戸大学、大阪市立大学）対抗、第六十四回陸上競技大会が行なわれた。

新グラウンドは、大学が、OB会を含めて多額の資金を集めて造つたもので、全天候型である。白線の引かれた赤いコースと、フィールドの緑の芝生が、周囲の深い木立に映えて非常に美

しく、環境は申し分の無いものに作られている。

三大学陸上競技部名と、平成二十六年七月十日が銘板に記され、メヨゴ（モチノ木科）の若木が三本、竣工記念植樹されている。

柿落しの大会と云う事で、我が大阪市立大学からも、OB・現役を合わせて、百名以上が参加した。

台風十一号が通過の直後で、三十五度以上の猛暑の中、文字通りの大熱戦となつたが、我が校が優勝、神戸は二位、一橋は三位となつた。

大阪の優勝は実に十五年ぶりの快挙である。なかには熱中症ぎみになり、早々と引き上げたOBも何名かいた

が、大会は無事終了した。

対抗戦恒例のレセプションは隣駅、立川の立川グランドホテル、カルロッグランテの間にて行なわれ、我が校からは、関淳一陸友会名誉会長（医昭36卒）、鶴谷研一会長（法昭42卒）他、最年長の私（文昭32卒）を含めて約百名が参會した。

前面舞台の前には、年配OB用にと丸テーブルが五台程用意されていた。若い現役の部員諸君は、立食バイキンの形がとられた。

三校OB会長の挨拶も終り、沢山の

御馳走を前に全員で乾杯の準備中、一橋OBの席でざわめきがあり、「大阪から泉と云うOBが来られているか探している」とのこと。私が参席の旨を伝えると、一枚の紙を持った年配の紳士が走る様にしてこられた。

「あなたが八十歳の泉裕君ですか、今日は本当に良くきました。これが、この……古文書……が出てきたんです」「私がこの五十九年前の手紙の宛の大島和郎です。共に八十歳になる大島です」



大阪市大陸上部OBの面々、
関淳一（医36卒）左から2人目 亀井信吾（商52卒）手前左

今年になって陸上競技部の部室を〇Bと部員で整理していく見つかり、青木会長に報告され大騒ぎとなり、大島さんのもとに届けられたと云う。コピー機もない時代に書き送ったもので、全然覚えていないが、現在と殆んど変わらぬ私自身の筆跡、内容は次の様に便箋に書いたものだ。要所をそのまま記すと、

「前略、三商大戦要項落掌致しました。

……中川部長、田中主将以下十五名三十日八時五十二分着の彗星号にて、上京致します……

なお米は持参致しますが、到着日の晝食と夕食、翌日の朝・晝と八月一日の朝食をお願いします……

……大阪市立大学陸上競技部

マネージャー 泉 裕

一橋大学陸上競技部

大島 和郎 様

よくもこんな手紙が、それもコケラ

落しと云う事で五十九年ぶりに訪れた一稿で、それにこの内容……と感慨に耽る間もなく、大島氏と共に、乾杯の段上に引っぱり上げられた。(大島氏は、かの有名な石原慎太郎氏と同期で、現在は自民党栃木県連の最高顧問で県議長とか要職に就かれている由)

「コケラ落とし」の大会と云うことで母校陸上部応援の為にたまたま訪れておられた。

た東京国立。まさかこんな事件が待つていたなんて。

大島氏の興奮、熱狂ぶりに驚愕し、呆然として祝杯を手に、段上に立ち尽くした。

大島氏の音頭に合わせて、私も共に乾杯を繰りかえす。

「私も八十歳だが、この泉君も八十歳！ 年齢よりはずつと若く見えるだろう！ 陸上部にずっと関わって来たからかも知れん！ 永く生きていると、こんな素晴らしい出会いが待っているとは」乾杯が終わっても大島氏の咆哮は続く。

「五十九年前のこの手紙を見てくれば、何と：(米を持って行くから、五食喰わせろ)と書いてある。当時はそういう貧しい時代だった。豊かな現代に生きる若い諸君は、大いに競技生活を楽しみ、将来も永く陸上部に関わって行って欲しい」。

壇上では次ぎ次ぎと各種目の優勝が上がり、優勝カップでの廻し呑みが延々と続けられた。

我々老年組は時を見計らって、それとなく挨拶をして最終新幹線に乗るべく、会場をあとにした。

後記 大島氏は「あの手紙は、事の顛末を記して、長く家宝とする」と云つておられた。